夜半のぬくもり

夜半のぬくもり

芳流（kaoru）

https://www.pixiv.net/novel/show.php?id=16344773

ダイの大冒険, ヒュンマ, ヒュンケル, マァム, ヒュンマフェス

戦後のネイル村でのひととき。夜中のお話ですが、全年齢向けで、極めて健全です（何）。
タイトル読みは「よわのぬくもり」。
激甘要注意。

表紙は、霞雪様user/3403063にお借りしました。

2021.10.17　ヒュンマフェスオータムにて設置のweb拍手お礼画面より再掲載。

夜半のぬくもり

　ふと、夜中に目をさまし、俺は寝返りを打った。
　すると目の前に、安らかな寝息を立てている彼女の面が見えた。吐息がかかりそうなくらいに近くで横になっている。柔らかい桃色の髪が、シーツの上に流れていた。
　その寝顔は、あどけなくて、数年前に、俺自身が崩壊させた神殿跡で出会った時の彼女を思い起こさせた。
　あれから数年が経ち、世の中は、魔王軍の侵攻の爪痕を癒し、復興しつつある。ここネイル村周辺の魔の森でも、モンスターが人を襲うことはめっきり減り、落ち着きを取り戻していた。
　そろそろ秋も深まる季節になりつつあり、夜半はすでに身を震わすような寒さとなっていた。ロモスは、俺が戦後しばらくの時を過ごしたカールよりもずっと暖かい気候であったが、さすがに冬を目前とした今の季節ともなれば、特に夜間の寒さは身に染みる。俺は、彼女が寒くないようにと、毛布を引き上げ、彼女の肩を覆った。
　布団の外の寒さが、いっそうお互いの体温を引き立てた。
　互いの温もりを感じながら眠りにつくのが当たり前になり、どのくらいのときが経っただろうか。
　ただ側にいるだけで安らぐ思いがするのは、傍らにいるのが彼女だからに他ならない。
　俺の方を向いて、体を横倒しにして眠る彼女の頬を、俺はそっと撫でた。
　すると、くすぐったかったのか、彼女が身じろぎした。
　起こしてしまったら申し訳ない。俺は手を離した。
　だが、愛おしさがこみあげてきた。
　俺は、彼女を起こさないようにそっと、彼女の額に口づけた。そして、そのまま、柔らかく抱きしめた。
　俺はふと、かつて、初めて彼女を抱きしめたときのことを思い出した。
　あの頃は、俺は、彼女への気持ちを抑え込もうと躍起になってい

た。触れてはならないと、密かな誓いを立てていた。
　だが、その枷が外れ、初めて彼女を抱きしめたあのとき。
　例えようもない甘美な多幸感の中に、身を焼くような苦しさを感じた。
　俺とともにあることを選択してくれた彼女に、その手を取ったことに、いまはもう後悔はない。
　いや、むしろ、このぬくもりを知ってしまった今、彼女に触れるまいと心に決めていた自分にはもう戻れなかった。
「感謝する、マァム・・・。俺とともにあってくれて、ありがとう。」
　彼女を起こさないように、俺はそっとつぶやいた。

　夜中に目をさますと、目の前に、いつもどおり、大きな人影があった。
　私は、その様にほっとし、そのぬくもりを確かめたくなり、手を伸ばした。
　額をその胸元に近づけ、そっと上目遣いに見上げると、夜目にも目を引く彼の銀の髪と、整った鼻梁が目に入った。
　ああ、よかった。ちゃんとここにいる。
　私はほっとして、温かい気持ちになった。
　もう何年も前のことになるが、まだ戦いの最中にあった頃、私は、何度も彼の背中を見送った。そのたびに、もうこれが最後になるんじゃないかと思い、その恐ろしい未来に目を向けないように、必死で己を奮い立たせてきた。
　大丈夫、きっとまた会える。
　別れの度に、涙をこらえ、何度も自分に言い聞かせてきた。
　それから数年が経ち、私の故郷で彼と一緒に暮らすようになってからも、私は、急にふらっと彼がいなくなってしまうのではないかと不安に駆られることがあった。もう、そんな心配をしなくていいはずだということは、頭ではわかっているのに。
　だから、こうして、夜中に目をさましてしまうと、つい、彼が隣にいることを確かめたくなってしまう。
　温かい肌。

力強い、引き締まった体躯。
　眠っている彼を起こさないように、そっと近づき、こっそりと額を寄せてくっついてみる。
　そのぬくもりが伝わってきて安心する。
　私は、つい呟いてしまった。
「ここにいて・・・。」
　あの戦いの日々の中、何度も口にしようとしてできなかった言葉。
　彼の背中を見送るたびに、言葉にしようとして、そして、遂に言えなかった思い。
　もう、こんなことを言う必要がないと思うのに、ときどき、急にあの頃の感傷が襲ってくる。
　ふと、私が額を寄せていた彼の体が動いた。
　起きたのかな、と思って様子を見ていると、寝返りを打っただけだった。
　上を向いていた彼の顔が、私の方を向いた。
　眠っている、と思ったのに、彼の唇が小さく動いた。
「・・・マァム・・・。」
　小さなささやきは、蕩けるように甘かった。私は、それだけで恥ずかしくなって、頬を赤らめてしまった。
　すると、彼の太い腕が伸び、彼は、傍らに眠る私を抱きしめた。
　私は、驚いて彼に呼びかけた。
「・・・ヒュンケル？起きてるの・・・？」
　けれども返事はなく、代わりに寝息が返ってきた。やっぱり眠っている。
　寝ぼけているのかな。
　だとしたら、かわいらしいな。
　そんな風に思っていると、耳元で、小さなつぶやきが聞こえた。
「・・・お前の側にいる・・・ずっと・・・。」
　その言葉に、私は、胸が熱くなった。彼の腕に抱きしめられたまま、その胸元に顔を埋める。
「ありがとう・・・。」
　私は、彼の背に腕を回し、彼の体を抱きしめ返した。

そうして、私は、心の中で何度も繰り返した言葉を口にした。
　もし、彼がいま、夢を見ているのなら、その夢にも届くように、と願いを込めて。